

灰色の陽と冬の紫陽花

崎本智（6）

*

曇り空が由比ヶ浜沿岸の街を蔽っていた。風をつよい午後で波風が水平線の向こうから吹き、防波堤に白い波がぶつかり砕け散っている。僕は教室からうごめいている灰色の海をみつめている。窓から見ている分には無音の世界だった。年久しく海など見ることはなかった。波は荒れ水嵩は増えていく。秒針の音だけが耳に入ってきて視界がぼやけ眩んだ。さつき見ていた夢が何だったのか思いだすことができない。呼吸を気付かれないうちに整える。周りの生徒たちは大人しく教員の声に耳を傾けている。僕はいつもおきざりにされていた。意識はまだ泥のなかにあった。やつと戻ってきたらこうして灰色の海を眺めていたのか。大型船が海上にいる。ここからだと言具の舟のようにちいさい。教員に肩をたたかれるまでぐつすと空調の効いたあたたかな教室で眠っていた。授業は終盤だった。教員の声は僕には届かない。遙か向こうに見える無音の海だけが現実であるような予感。嵐のような波の高さが僕にはとてもなつかしいものに感じられていた。聴こえてくる、ほんとは聴こえない想像上の波の音。波の音は僕の脳内に浸透して繰り返されていく。灰色の海が僕の意識の深い部分に共鳴していたのかもしれない。こんなことをいうと周りの友人たちにばかにされるけど。終礼の合図と同時に僕の意識は水面近くまで上がってくる。

倫理の授業が終わり、古村が鞆を抱えて教室をでていくのを目の端でとらえた。おとなしい女の子で僕は彼女のことをよく知っていた。古村はクラスのだれとも話をせず冬枯れ木立がならぶ校庭を歩いていた。陽は雲間から光を校庭の土に落としていたがわずかな量でしかなかった。僕も友人から小説を借り適当な話を済ませて下校する。下足室に降りたときつめたい風が校舎に入ってきた。詰襟は寒くはなかったけどマフラーを巻いてくれば良かったと思った。寒気がおとずれて太平洋側も本格的な冬をむかえる。陽はまた雲のなかに隠れてしまった。校門までつづく桜の木は幾条もの枝を天にのびしながら聳えている。薔は枝枝にみつけることができた。並木道の小枝の下を幾人もの学生服を着た集団が通り去っていく。おおきな高校だったから別棟からも集団が吐きだされている。

僕は憂鬱そうな顔をしてひとり歩いていった。天気が悪くて気持ちものらない午後は何を考えればいいのか見当もつかなかった。バス停に着くまでの途中で雹がふりはじめた。鎌倉で生まれて十七年、初めて雹をみた。雹は薄い雲から生まれて地面にたたき落とされていった。だれも傘をもっていなかったから、生徒たちは一様に雹の犠牲になっていた。停車場と同じ学校の生徒がいて古村もいた。皆も僕と同じように憂鬱そうな表情をしてバスを待っていた。鞆から参考書を取りだして眺めている子ばかりだった。僕は長椅子に座らず古村の後ろで立つて待つことにした。厚くなった雲は静かに上空で浮かんでいる。野球部のバットの金属音が校舎からひびいてくる。雹のなか練習をしているのだろうか。

ふいに古村の髪に氷の粒がついていることに気がついた。氷は溶けるようすもなく髪についたままだ。気がついていないのだろうか。僕は古村に気やすく髪の毛についた霜を指摘することもできなかったから本を出して読んでいた。古村とはじつはもう何年も話していない。バスのなかは混みあっていた。古村は偶然あいた席に座り英単語帳を眺めていた。僕はすぐ傍に立ち、吊革をにぎりながら詩集を読む。古村は僕に一瞥もせずに英単語を声にださず暗唱していた。唇のうごきで分かる。霜のふる街には人気はなく幽霊のような街を車の行き来だけが盛んになっていった。(市役所前)で古村の隣の席の客が降り、入口からどこから現れたのか、大勢のひとが乗ってきた。

「中におつめください」という整った声が聴こえ、ふいに僕は古村の横の席に腰を下してしまった。古村は水色のイヤホンを耳につけて英語を聴いていた。イヤホンから明朗な発音がもれ聴こえてくる。髪についた霜はもう溶けてしまったようだ。昔はよく遊んだのに中学で離れてから偶然高校で再会しても、向こうはだれとも話をしなかったから僕も話しかけることができなかった。気まずさを感じていたが古村はもしかしたら知らんふりをしているのではなくほんとうに気がついていないのかもしれない。昔のことなど忘れて僕のこととも記憶していないのかもしれない。あの頃の古村はもういないのかもしれない。隣の車で座っているのはほんとうに別人なのかもしれない。彼女は顔色一つ変えずに英単語を覚えつづけている。曇り空の街を走りながら車内は暗澹とした雰囲気乗客は決まりごとのように口を閉ざしていた。靴についた霜や雪が車内の床を黒く染めて陰気な印象をよりつよめていた。僕はだんだん気まずさになれていったのかもしれない。この記憶喪失の古村とこれからどこかへ旅行にでもかけるような気持ちで愉快になっていた。

バスが海から離れて緩やかな傾斜地となっている住宅地の方を走り始める頃には乗客の人数はだいぶ減っていた。丘の上に僕の家があつて古村の家もある。もう高三になるのにそんなことをいまさら思いだしていた。中学を過ぎた頃から僕たちの交流はとたえた。最後に遊んだのは小学校最後の夏休みでとびきり暑い日だった。数人でかくれんぼをしていたがだれとしていたのか覚えていない。あの日のことを思いだすと僕と古村以外の友人の顔はのつぺら坊で登場することになる。僕が古村を竹藪近くのごく細い路地でみつけたとき、古村は泣いてしまう。ちいさな排水溝に黒い水がながれていて、路地の角にはお地蔵様が立っていた。湿気が多い場所で草いきれや苔むした匂いが辺りにたちこめていた。どうして泣いているのか分からず僕はおろおろした。なぜ泣いたのかいまになっても分からない。僕はかくれんぼを中断して古村にひたすら詫びた。古村は両手を目にあててしばらくしてから泣きやんだ。茅蝸（まぐし）の鳴き声に交じって笹の葉がすれる風の音が聴こえた。細い路地は夜のように暗い場処（ばり）だった。結局僕たちはそこで何を話したのかすら覚えていない。

車内の振動が睡魔をよび、僕はうとうとしはじめた。僕は古村のことを考えながら夢のなかに落ちていくようだった。あの夏、路地で過（あ）した一時（ひととき）から僕たちの時間は止まったままだ。そのときどれぐらいぶりだろう古村が僕に話しかけてきた。

「塩田くん、何を読んでいるの」

僕のことを覚えていた。

『長い川のある國』……」

心臓がおおきな音で鳴っている。

「多田智満子さん。初めて見る名前だ。おもしろいの？」

古村はさいごに話したときと全然変わっていないように見えた。

「言葉がすごく丹念に選ばれている気がする」

「塩田くんは昔から難しいこと考えているから詩なんて読めるのね」

「ぎゃくだとおもうよ。何も考えていないから読める」

「芸術ってわたしには分からない。詩を読むなんてえらいよ。あんたはえらい」

古村は笑ってこちらを見る。冗談に決まっているのに僕は不器用に受けとめる。

「そうかな……。古村こそ、たくましく生きているじゃないか」

古村は面喰ったような顔をしてまた僕をみつめる。

「たくましく生きているか。それってわたしが物凄い悲劇を背負っているみたい」

古村はふっとちいさな息をつくように笑いだす。僕は冷静になり、言葉を引っ込めるように言う。「日常で〈生きる〉なんて言葉そう使わないか」一瞬後、古村は次のように言う。

「生きているということは一つの病気である。誰もがその病気によって死ぬ。……ポール・

モーラン。わたし、桜の枝を見ながらずっとその言葉について考えていた」

「え」

「倫理の時間に新藤が言ったの」

「あいつの授業眠いから殆ど何も聞いていないわ」

「そうかな。新藤ときどき面白いこと言うよ。わたしさっきの言葉がずっと気になってるの。塩田くんもそういうこと考えるの好きでしょ」

「ビョーキってこころの病のこと？ いま流行っているね。そういうの」

僕の応答が気に入らなかつたのか古村は口を閉ざしてしまった。丘の上にわずかに切り開けた場処があり、そこでバスはＵターンをしながら停車する。駄菓子屋やパン屋などがありちいさいけど、スーパもある。主婦らしき女性が数名立ち話をしている。街路樹として植えられたトネリコの傍でなわとびをしている子供たちもいる。バスを降り、古村は自分の家の方角をみつめる。何年ぶりに会話をしたのだろう。僕は不思議な感慨に耽っていたのかもしれない。でももう少し話がしたい、ってことを素直に伝えられなかつた。

「じゃあ、古村、バイバイ」

古村は両手で鞆を持ち振り返りながら「さよなら」と言った。

母はでかけているようだった。恐らく松下の家の娘さんに着着けを教えているのだろう。嫁入り修行にお茶を習いに行くなんて時代錯誤だと僕は松下の娘さんをばかにしていた。娘さんといっても僕よりも八つ年上なのに。食卓には林檎が切られておいてあった。熱いお茶を飲み、林檎を食べながら暖房が稼働している音を聴いて呆然としていた。古村との

会話を思いおこしていた。彼女とのやりとりを頭のなかでリピートする。曇天の日には夕焼けさえ見ることができず、辺りはすぐに夜になっていった。

父の書齋に入った。父がよく吸っていた煙草の匂いがまだ部屋に残っている。本棚には松本清張や西村京太郎の文庫本などが沢山並べられていた。子供の頃は本を沢山読んでいた父に密かな憧れを持っていたものだがいまはそういう感慨もない。火の気のない部屋は一段と寒く僕は身を屈めてその部屋の古い匂いのなかにいた。白い毛並みに黒の斑模様が入った我が家の猫が現れた。サロマトという名前前で父がアイヌ語からとった。父が亡くなってから聞く宛てもなく意味はずっと分からないままだ。サロマトは黒い斑が右目の周辺にも入っており父はそれを見て「パンダ猫だ」と言ったものだった。サロマトもそう毎日言われると僕が小学生の頃拾ってきた当初ガリガリだったのにパンダのようにふつくらとしてきた。運動もせず家で炬燵の番ばかりしている。サロマトを半目でみつめながら僕は無気力になっていき身体をずると床にあずけていった。床のつめたさに身体を強張らせながら芋虫のようにちぢんでいく。サロマトは尾をつつと立て僕の顔をゆつくりと観察している。サロマトを撫でてやりながら僕は自分を忘れそうになる。そうして僕はまた靴から詩集を取り出して暗い部屋で読みはじめる。最早、何が書かれてあるのか意味を読みとることもできずただ目をうごかしていた。そのうちに意識が失われていく。午後六時になったとき大正からあるという我が家の柱時計が鳴りひびく。僕は身体を震わせて辺りを見回すと毛布がかけられてあった。

「禎夫。父さんの部屋に行くのは構わないけど床で寝ないでよ」

階下からおおきな声で言われる。なぜ僕が起きたのに気がついたのか分からない。姉が夕食を作っているようだった。包丁で野菜を切る音がして味噌汁の香りが漂ってくる。

「夕飯、何？」

「ぶり大根と角煮。ねえちゃんの得意料理よ」

「……」

姉、瑠璃はいつも明るい。僕は根暗で姉から注意を受けてばかりいる。対照的なきょうだいで周りの大人たちにはいつも比較された。姉は都内の大学の薬学部に在籍していた。なぜ薬学部なのか、薬剤師になりたいのか僕は訊いたことがなかった。けど姉がはつきりとした理由を持っていることは分かった。姉は薬品の研究に没頭していた。家に帰ればいつも勉強をしている。他にやりたいことがないのだろう、僕はそう思っていた。姉の化学の知識は異常なぐらいだった。明るい姉がなぜそこまで勉強に没頭できるのか、いつも不思議に思う。姉の明朗さについていけない僕は自室に戻り、数学の予習をする。「導関数」を習ったばかりで僕は苦労して問題を解いていた。数学はいつもすぐ集中できるのに、久しぶりに古村のことを意識したせいか妙に落ち着かない。立ち歩きながら教科書を読んで、も全然頭に入って来なかった。朔太郎の詩も吉本隆明の詩を読んでも集中することができない。部屋の隅に隠してある卑猥な本を眺めて見てもその気持ちを抑えることはできなかった。古村の肌に触れたい、匂いを嗅ぎたい、明確にそう思ったのはそのときが初めてだ

った。

小六で古村と同じクラスになった。それまでの五年間はずっと違うクラスだった。小学校には入るまえから古村のことは知っていて家族間で付き合いがあった。けど五年間同じクラスにならなかったからあまり遊ぶこともなかった。古村は生き物や動物が好きで飼育委員になっていた。いまみたいにだれとも話をしないこともなく明るく元気な女の子だった。髪を肩まで伸ばして赤色のリボンをつけていた。白いシャツにサスペンダーでとめた紺のスカートを穿いてきていた。水泳が得意で勉強がよく出来た。クラスでも一目置かれる子供だった。僕はその頃、絵画教室に通っていて絵を描くことに夢中だった。古村は「塩田くんはとても絵が上手」とよく僕のことを褒めてくれた。僕は古村の良いところを褒めることができずにもじもじしていた。古村は僕のスケッチブックをときどき勝手に見ている。「これは何」と僕が素描していた海の世界を描いた絵に興味をしめした。「イルカとペンギンの楽園」僕はそうつぶやいた。「可愛い」古村はその頃から僕のなかで特別な女の子だったのかもしれない。僕の絵は学年でも評判になり県のコンクールで入賞したこともあった。僕は得意げになり休み時間は友達と校庭に見える木々たちをデッサンすることにはまっていた。中学になり、そういう行動が「調子にのっている」と言われるようになり、僕は一時期不登校になる。中学は古村と違う学校だったため彼女の中学時代について僕は全然知らない。病気でもないのに布団のなかに入り半年ほど過ごしていた。何がきっかけだったのか分からないがいつしか保健室に通うようになり友人たちの助けもあり学校にまた通うようになった。

僕は日曜日のある朝、海岸にでかけた。季節は梅雨まえだったと思う。画材道具一式を抱えて海を見にいった。砂浜には殆どひとみいらずサーフィンをしている青年が数名いるばかりだった。沖には一艇のヨットが浮かんでいた。僕は砂浜に体育座りをして画板を膝にあずけて灰色の海を描いた。生あたたかい風がおだやかにふいていた。お尻の下の砂はすこしだけ湿っている。いまにも雨がふりそうだったけど、今日みたいに海は荒れておらず波はゆったりとたゆたっていた。海という容器はあまりある水をもてあましてるようにも見えた。僕は二時間ほどで絵を描き上げた。灰色の空、灰色の海で少年がちいさな背中を向けて素描をしている絵。その絵を最初で最後の自画像と決めた。僕はもう絵画世界のような深海にはもぐらわずに友人たちと浅瀬であそぶことにする。言葉にできないような決意をかためたと、画板を海へ放り投げた。画板は船のように沖へ旅立っていった。絵具チューブの黄色や橙色や赤色を取りだして海へ向けてしぼりだす。明るい色たちは真下の蒼にのみこまれていった。僕の二十四色の絵の具はそうして海のなかで交ざりあっていた。三年分のお年玉で買ったホルベイン社製の三本の絵筆も順番に折った。もう二度と描かないための決意として。僕は浜辺近くの小高い丘の上に生えてある椰子の木の根元に三本の絵筆をお菓子の缶に入れて埋めた。ふと水平線を見たとき雲がさきほどより晴れていて夕陽が淡い桃色を空に映していた。薄い雲で霞んだ夕陽は膜のなかに包まれているように滲んでいた。僕は葬式に参列した気分であつた。不思議と気持ちは晴れやかだった。

それ以後、美術の時間も皆と同じような凡庸な絵を描くように努めた。なるべく「普通に」描けるように僕は努力していつの間にか本当に絵が下手くそになってしまった。わずかな時間がひとをあっという間に変えた。僕は流行りの言葉づかいを友達と同じようにして携帯ゲームに熱中した。両親はそんな僕を一步下がって見ていて介入してくるようなことはなかった。

*

十二月に入ったばかりの日、僕は放課後のＯＣルームにいた。アメリカやオーストラリアの様々な風景や動物の写真が壁面に貼ってある。吹奏楽部の楽器の音合わせが校舎のどこからか聴こえてくる。生徒たちは下校しているか部活に行っているかで殆ど校舎にはいない。静けさに満ちた部屋で僕は下柳が来るまで詩集でも読もうかと思ったら、先にだれかが入っているようだった。一人の女子がソファに座っている。前のめりで物を書いている。いや問題を解いているのだ。古村だ。

「何か用？」夕陽が窓からさしこんできて古村の顔に影を投げる。前に一緒に帰ったときよりもずっと機嫌が悪そうだ。泣いていたのだろうか。古村はちらりとこちらを見ただけでまた問題集に向かって鉛筆をうごかしていた。この女はいつも勉強ばかりしている、と少し軽蔑するような気持ちで後ろから見ている。僕が反応しないからもう一度古村は振り向いた。やはりそうだ。古村が苛立っている。けど僕は態度を変えなかった。

「英語の下柳に呼び出されて小テストを受けに来た。ここ英語教員室の目の前にあるから使いやすいだろう。古村こそ、何でここに」

「お願いをして放課後借りているの。だれもないと集中できるでしょ」

「古村。何で君、カラオケとか買物とか行かずにいつも勉強しているんだ。勉強がそんなに好きなのか」

「自分こそ、カラオケとか買物なんて行かずに本読んでばかりじゃない。塩田くんには関係ない話……」古村は俯いて黙り込んでしまう。彼女がほんとうに怒っているのが伝わってくる。古村はこちらを見ずにつづける。

「だけど教えてあげようか。わたし、だれとも話したくないの。この学校の先生も友達も親も皆、嫌いだから。話しかけてほしくないから。勉強をしていると誰も話しかけてこないでしょう。親だって何も言っていないからそうしているだけ」

「昔はそんなことなかったじゃないか。明るかったのに」

「いつの話してるの」

「ついほんのちよつとまえだよ。かくれんぼしたの覚えているか」

「ばかじゃない」古村が英語長文の問題集を机にたたきつけておおきな音がした。

僕は怯まずに言葉をつづけていく。「大学は東京方面をねらうんだろ」

「なんで知ってるの」

「このまえ理科大の赤本、図書館で借りてただろ。図書委員の岩崎から聞いたよ」

「個人情報漏えいじゃない。理科大にするかどうかは分からないけど鎌倉は出るの。実家においても退屈なだけだし、東京なら何かみつきりそうな気がする。ここの学校のひとたちと話しても全然おもしろくないもの」

私立中学に進んだ古村に何があったのか僕は知らない。彼女が考えていることが僕には全然理解できない。自分が小学校まで一緒に遊び、先日バスで一緒に帰った女に他ならぬのにどうしてこんなに別人のようなのか分からない。

「都会なんて何もないよ。人間ばかりだよ。『三四郎』という小説で都会では責任が分散されてだれかが路で仆れていてもだれも助けなくて書いてあったよ」

「そんな小説知らない。鎌倉にいるよりはいいもの」
「そういうものかな」

「塩田禎夫くんはいまも絵を描いているの」

僕はふっと笑った。姓と名を一緒に古村の口から呼ばれて何だか小学生の頃に戻ったような心地がした。僕はしばらく沈黙を保ちつつ古村の横に腰かけた。古村は動じない。

「描かないよ。絵はもう描きたくないんだ。美術の時間も無理をして描いている」
「どうして」

沈黙が僕にとって不利にはたらくのは目に見えていたのにそうするより仕方なかった。何もほんとうのことを表現する確かな言葉をみつけられなかった。この女に弱いところはあるだけ見せたくない。少なくともいまだけは。僕は諦めたように鞆をもち下柳との約束をやぶり扉の傍で「飽きたから……」と一言つぶやいてOCLームを後にした。

煙幕がはなれたような空だった。

中学の頃よく聴いていたバンドの歌詞が脳内で何度も再生されていく。昔持っていたプレーヤーでよくそれを聴いていた。同じフレーズが連呼される幼稚なものでいまはそんな音楽はださいと思っていた。けれど自分はバスに乗ってもだれも気付けないぐらいのちいさな声でそれを歌っていた。唇がその凡庸な言葉をもとめていた。おきまりの愛や恋、永遠についての歌詞に満たされていく。車内は変に埃っぽく僕は薄い殻のなかに閉じこもっていた。車窓にながれていく宵闇の風景が僕をつつむようで僕は薄い殻のなかに閉じこもっていきような心地がした。古村との会話を思いだすたびに頭痛に近いものに支配される。自分の喉を引き裂いてしまいたいような感覚。停車場で降りたときには冬の空に星がでていた。冬の匂いがアスファルトから漂ってくる。しんとした厳粛なつめたい空気。坂道を登りながらまたちいさく歌う。坂道のガードレール添いのフェンスを指で触りながら古村のことばかりを考えていた。金属のつめたさがいまの感情にあっている気がした。僕は真冬につめたい感触を期待していた。感情が乱れていたことに自分でも気が付いていない。

静まりかえった家に姉の気配は感じられず、薄暗い部屋で着替えもせず制服のまま床につつぶしてしまふ。憂鬱が僕をとりまいていた。近づくことも離れることもできない距離で憂鬱は僕を見さだめていた。夜がいまにもやってくる気だるい時刻。憂鬱の存在はます

ます膨らむようだ。僕は古村のことを考えながら目を瞑る。いまにも薄闇にひきずりこまれてしまいそうなか細い意識の糸をたぐりよせながら両手の指からこぼれていく砂粒。砂粒がさらさらと落ちていく光景。目を閉じた暗闇でそればかりが見えてしまう。眠りに陥りそうなきときは妙なものを見る。眠っても古村のことをまた考えてしまいそうだった。僕は諦めた。だから擦り切れるぐらい視聴した外国映画を見はじめてしまう。

*

海の生物が壁紙に描かれている。マンタやイソギンチャクやエンゼルフィッシュにハリセンボンにマンボウ。色合いがさまざまな魚たちの絵は薄闇のなかでは何だか悲しそうな表情に見える。壁紙をゆつくりと映しながら部屋の中央のベッドで寝ている少女に焦点がしぼられていく。少女は十代後半ぐらいだろうか、息もたてず安らぎに満ちた表情で眠っている。ベッドスタンドには貝殻のかたちをした蠟燭がおかされていた。貝殻は半分ぐらい溶けたときに火を消されたのだろう。静謐な朝の空気が部屋のなかに満ちている。そこへ栗色の髪の少年がやってきて戸惑いながらも少女の身体をゆすりながら起こそうとする。スペイン語だろうか。なめらかな言葉で朝の到来を告げる。けれど少女は心地よさそうな表情をくずすことはなく巻貝の奥深くに入っていくように眠りから覚めることはない。少年は困った顔をしてその場に立ちつくす。カメラはまた海の生物たちが描かれた壁紙に視点を戻して色彩豊かな魚たちをおいかけていく。次の瞬間、少年の額が少女の額にあわさって肌がふれあうような接写でカメラが二人をとらえる。少年は少女の鼻孔にみずからの顔をすりよせながら匂いを嗅ぐように、隙をつくように唇を少女のかさねあわせていく。唇は唇によってひらかれてそのなかを生き物のように少年の舌が出入りしているのが分かる。カメラは同じ視点からそれを映しつつづけていく。少女は苦しそうな表情を浮かべるが決して少年をつきはなすことはなくゆつくりと岩礁のなかにひきいられていく。少年は畏にはまるつもりは毛頭なく少女を深い海の底からひきあげるつもりだった。地上からもってきた酸素を口のなかにためこんで、彼女にそれをわたそうとしていた。ところが鴬たちの鳴き声が遠くから聴こえたとたん少年は少女のすぐ横に身体をくずしていく。意識が消えていくのがカメラを通してみても明らかだった。少年は少女の唇から深海の泥をのみこんでしまい眠りに陥っていく。カメラはさいごに二人の手のひらがひとつの貝のようにかさなっていくところを映しておわる。時間にして五分ほどのショートムービーで深夜に放送していたのを録画したものだ。僕はそれを何度も見ている。理由は分からないが自分にもこうした時間がいずれおとずれるような気がしてならなかった。

僕は玄関の棚におかれた花瓶から蘭をとって、紙切り^{はきみ}鉢で乱雑にその花の茎や花卉を切り分けて部屋のなかに撒き散らした。妖艶な香りが満ちていく。いつか、こんなことをしていた小説の主人公がいた。だけだと思いだせない。畳の上には白い花卉がひろがっていて僕はその上に体をあずけて横になった。畳の上には水滴がいくつも落ちていて僕はそれが

誰かの涙であるような気がして落ち着かない。この行為が『それから』の代助の真似であることに気がついたとき僕は寢息をたてて眠ってしまった。

*

唐突なことは起こる。でなければ唐突という言葉も生まれなかっただろう。僕は古村の電話番号をクラスに配布された「緊急連絡網」を使い割り出した。なぜそんなことをしたのだろう。自分でも分からない。しかし古村を自分がひとり占めしたい、端的にいうとそういう感情が線として走った。僕は公民館近くの電話ボックスに入った。電話ボックスは恐らくここ何年も殆ど利用されることもなく、おきざりにされた廃船のように存在していた。僕はここから時間を巻き戻すような気持ちで電話番号を押した。

「古村郁子さんはいらっしやいますか。古村さんのクラスメイトです」

そう何度も頭のなかで繰り返しながら古村の家族の声を予感していたのに現実には

「はい」という古村本人の声で僕を迎えた。僕はどぎまぎしながら、「古村か、おれだ」と言った。「塩田くん？」おれという使いなれない一人称が出ておどろいたのは僕自身だ。

「突然ごめん、君がいま何をしてたのか分からないが君のことだから時間を無駄に過ごしてはいなかっただろう。それを知りながら言いたいことがある」

「まどろっこしい……」

「ごめん、君の絵を描きたい、ただそれだけなんだ。だけど……察してほしい。どういう意味かを。どうしてこんな気持ちになったのかは説明できない」

「そういう告白のされ方は初めてだけど、どうすればいいの」

「僕の絵のモデルになつてほしい。僕の家は知っているだろう。明日はだれも家にいない。来てほしい……。僕はもう一度絵を描きたい」

緑色の公衆電話の上に財布から出した十円玉を重ねていく。ど鳩の長い鳴き声が電話ボックスのなかにまでひびいてくる。長い沈黙の後、古村は「分かった」と言った。

古村は白いシャツに灰色のカーディガンとデニムと言う服装で僕の家に来た。もちろん化粧もしていない。つめたい空気にひやされて頬がほんのり紅く色づいている。

古村は僕の家にあつた万華鏡を覗いていた。万華鏡は古くから家にあつた。多分、母が子供の頃にも買ったものだろう。少女の頃に自分の母が覗いていた鏡を古村も覗いているのだと思うと不思議な心地がした。姉も昔はその鏡を覗いていた。いまでは誰も触らなくなり、和たん筥の上のこけしと一緒に並べられていた。いつか過去に自分もその万華鏡を覗いたのだろうかと僕は思いかえしてみたが一度も覗いた記憶はでてこなかった。女たちが覗いた鏡。何だか怖ろしかった。女は細片が散り散りに散らばり集合していくのを飽きもせず正坐をしていつまでも見つづけていた。

「そんなにおもしろいものか」

「うん、うちの家には万華鏡なかったから」

いつしか万華鏡のしかけに興味をなくした女たちは鏡台のまへの自分の顔を熱心に覗きこむことになるだろう。古村が化粧をしているのを見たことはなかったがこの女もすぐに化粧をするにちがいないと僕は思った。時間のながれかたはひとつによってさまざまに僕たちは時間のながれを共にすることができるのであるだろうか。万華鏡を覗きこむ古村の横顔は色彩をはなつていて眩しかった。髪は電がついていた曇り空の日よりもずっと綺麗に見えた。古村の傍にサロマトが近づいてきて鳴く。古村はサロマトの喉を優しく撫でた。

「絵はどこで描くの」古村はこちらを見ずに猫を撫でたまま訊く。

「父の書斎で。あそこが一番落ち着くから」

*

古村の肉体はくびれることもなく膨らむこともなく平坦なものだった。果実のように乳があることを期待していた僕はおどろいた。自然光の明るさだけで十分絵を描くことができたから、僕は照明をつけなかった。肉体につきまとう陰影も僕は絵に織り交ぜてみたかった。肌が白く陶器のように艶があった。ただ一点、内股に親指の腹ぐらいのおおきさの紫色の染みがあった。僕はそれが妙に気になりまじまじと見つめてしまった。「変なところをじつと見ないで。火傷の跡だから」暖房がつよすぎるのか古村の体は少しづつ淡赤色に火照っていた。思わず僕は我慢できなくなって臍のあたりを指の腹でなぞると古村はくすぐったそうな顔をした。

「早くはじめようよ」

その言葉に僕は一瞬どぎまぎしながら、鉛筆をとって紙に輪郭を書きはじめた。

「写真は嫌いな。写真のなかに映る自分が許せないな」

古村はときどき自分に言うように一人言を發した。僕はそれに返すこともなく無言で筆を滑らせていく。はじめは恥ずかしそうにしていた古村もやがて慣れ、直立した肉体から羞恥の感情は消え失せていた。本棚の上に登ったサロマトも丸い眼で古村をみつめていた。サロマトの瞳のなかにも裸の古村がいる。玄関の鍵を開ける音がする。

「背景が寂しいな……。あとから君のうしろに蘭の花が活けられた花瓶を置いてもいいかな」古村は両手を前で組み、体を左右にゆらししている。「古村……？」僕は彼女が何を考えているのか読めなかった。そしてつまらなそうな顔をして頷いてから

「ねえ塩田くん、紫陽花を背景にして写真をとったこと覚えてる？」と尋ねられた。

唐突に古村が僕をみつめて言った。僕は「覚えていない」と応えた。何のことか分からない、紫陽花……。古村が裸のまま近づいてきて「思いだして」と駄々をこねるように僕の肩をゆらした。僕の心臓の鼓動は高鳴っていく。この女が何にこだわっているのか一欠片も共感できない。彼女は真剣な表情を崩さなかった。諦めない古村がうるさくて僕は少年のような古村の体を抱きしめて接吻をした。古村は水をかけられたような顔をして唇をあずけたままじつとしていた。陶器のわれるような音が傍でなり、本物の水の音が床にひる

がった。サロマトが何かを落とすのかと僕は音の鳴った入口の方を見る。書斎の入口に立っていたのは花瓶を床に落とした姉瑠璃だった。

「あんたたち……何しているの……。あなた郁子ちゃんじゃない」

「ねえちゃん、これは僕が古村を呼んだことなんだ。お願いして脱いでもらった」

「あんた絵を口実に何をしているの。絵ってそんなもののためにあるの？」

古村は手早く着替えると姉と目をあわせずに「失礼しました」と頭をさげて帰っていった。サロマトも場の空気が変わったことに気付き、そそくさと退散してしまう。残されたのは瑠璃と僕だけだった。

「いけないこともないけど……あんたら、受験も近いんだから……」

瑠璃は髪に手櫛を入れてばつが悪そうに言った。瑠璃は台所に立つとさっと味噌汁をあたたためて夕べの残りの高野豆腐を食卓の上でだし自室に入ってしまった。姉の泣く声がある。姉にも幼馴染がいて高校生まで二人は付き合っていた。彼はいま外国にいと聞いた。なぜ外国に彼が行ったのか僕は姉に理由を聞いたことがない。ほんとうに外国に行ったのかすら分からない。物音のしない夜更けに僕はだまって夕食を食べていた。

古村と僕の関係が変わったからといって友人や同級生でそれに気が付くものはいなかった。僕たちは学校ではときどき顔を見あわせるものの何を言うでもなく視線をそらしつづけた。それは時間の経過と共に古村との関係をじよじよに蝕んでいき、鎖が錆びていくように僕たちはあつという間に断ち切れてしまいそうなほどの関係になっていった。僕は自分の腑甲斐なさに腹を立てて微熱のなか古村に放課後話しかけてみた。平熱の僕ならそんな大それたことはできなかつただろう。酒をあおろうかと思っていたけれどちよどよかつた。それは掃除の時間がじまつたばかりでクラスの皆はあわただしくうごきまわっていた。古村はだるそうに日直日誌をまとめている最中で僕に話しかけられておどろくかと思つたら安心したような顔で僕をみつめ返す。

「塩田くん……」

「古村、今日一緒に帰らないか。僕は自転車で来たんだ。送っていく」熱にうかされながら文節の切れ目がどこかおかしくないかと変なことを気にしてしまう。緊張はしていないかつた。古村は「いいわ」と了承してくれた。数人がその光景を見てひそひそ話をはじめたけど僕はそれを一向に気にすることもなく、窓を丁寧に拭き掃除を終えて日直日誌を職員室に返しに行く古村に付き合ひ、駐輪場へ歩いていった。

「どうしたの、突然」古村は嬉しそうに尋ねてくれる。

「どうしても見せたいものがあつたんだ。いまの時期を逃すとしばらく見れないからね」

自転車のステップに足をかけた古村を乗せて発進する。古村は立った姿勢のまま僕の肩に手をかけてくれている。僕は自転車をこいだ。一生懸命。僕は何度か自転車を止めて古村に詫びながら息を整えた。血の味がする。あまりの息切れに古村が僕の体調の変化に気が付き額に手をあてた。太平洋の向こうは白く薄い雲に覆われていて光のなかを走っているような気さえた。太陽は薄い雲から弱い光を由比ヶ浜の街にそそぎ世界はほとんどん灰

色の世界に移り変わっていくようだ。しばらく額に手をあてられながら古村の手のつめたさに気持ちをよくしていた。「やっぱりひどい熱だわ」古村は急にステップから自らの足を離して飛び降りた。僕は「え」と戸惑い、五メートルぐらい進んでからやっと停まって振り返った。古村は冬風吹きすさぶ路上に立って決意したような顔をしている。

「わたしがこぐわ」

古村はそう言った。僕は熱に支配されながら黙って従った。情けなかった。立つこともできなくて古村の腰に手をまわして後ろに座った。「振り落とされたら自己都合だからね」古村はそう言いながら自転車をこいだ。後ろから来た江ノ電が僕たちを追い越して行った。江ノ電には殆ど乗客はおらず伽藍堂だった。江ノ電は海沿いを走りながら線路との摩擦音を鳴らして見えなくなっていく。速度は十分確保されていてとても古村がしんどそうには見えなかった。しかし運転が下手で何度もガードレールにぶつかったりしてやっとなに行きたかった材木座にある青瀧寺という寺院までたどりつくことができた。青瀧寺の山門はおおきく本堂は林のなかに建っていた。山門に目の見えない僧侶が立ち「どうしましたか」問うてきた。僕は「お池を見せてください」と言った。僧侶は杖をつきながら「あなたでしたか」と僕に言い、再会を喜んでくれる。山門をくぐりゆつくりとした僧侶の足どりにあわせながら僕たちは本堂の中庭にある蓮池まで通してもらった。「おいくつになられましたか」「十七になります。来年、受験します」「そうでしたか。お連れの方はガールフレンドですか」「はい」僕は照れながら言う。

本堂の廊下は靴下を穿いても非常につまたく修行をしているようだった。僧侶は廊下まで来るとすると歩き僕たちをおきざりにするぐらい速足になった。古村も足をじたばたさせながらつめたさをまぎらわしていた。時折僕の額に手をあてて体調を心配してくれた。住職や尼僧たちが作業をしている部屋を横切らせていただき、僕たちは深奥にある蓮池までやって来た。僧侶は気が付くと姿を消して僕と古村しかそこにはいない。冬の蓮池は悲惨な風景をつくりだす。蓮たちは枯れ果てて水面を串刺しにしていた。夏の蓮池が見せる神秘的な美しさはない。沈倫ほろびの日に立ちあうような禍々しさ。うるおいに満ちた、たおやかな葉はもちろん一枚もない。青や白や桃色に染められた上品な花は残らず落ちてしまった。蜂の巣のような花托が斉しく下を向いている。「はちす」と呼ばれる種子で何だか冥府の匂いがしてならなかった。うんと昔にその種子を食べる習慣があると聞いたとき、とてもおどろいた。化石のように硬そうなのにもかかわらずスポンジのように破れるそうだ。枯れ草のようになった茎たちは糸くずのようにからまりながら水のなかにおきざりにされている。水面には処々に氷が張っていて蓮たちを封じ込めているようにも見えた。氷の割れた場処から暗い水が見える。全体が、この世の終わりを見るような景色だ。

「見せたかったものってこれのこと」

「うん、気持ち悪いかな。僕はこういうものを見るとぞわぞわってするんだ」

「昔見せてもらった塩田くんの絵のなかの世界でこういうのもあった。グレーが多く使われていて忘れられた場処って言えばいいのかな。そういうものを多く描いていたよね」

「生きていくということは一つの病気である。誰もがその病気によって死ぬ。……あの言葉聞いてから考えていたんだけど、やはりひとは病気がないと生きていけないんじゃないかな。健康と病気っていう二項対立じゃなくて二つはつねに織り交ざっているんじゃないかな。病気が健康な精神をつくることもあると思う。配分をまちがえるとだめだけど」

古村は笑い、「塩田くんはいま思いつきり病気だから、早く帰って休んだ方がいいよ」古村はこの冬の蓮池を満足してくれたのだろうか。訊いてみることは怖くてできなかった。

帰りは古村がまた自転車をこいで僕を家まで届けてくれた。僕の熱は四〇度近くになっていて姉にこっぴどく叱られた。姉は布団をしいて粥をつくってくれた。僕はミネラルウォーターと林檎を布団の傍において三日ほど学校を休んだ。体が休息を求めている。そう思うことにした。寝ている最中も古村を描いた絵のことが気になってしかたがなかった。あの絵のつづきを描いている夢を見ってしまうほど執着は離れることがなかった。

夜、姉が枕元に立って梅酒を手持っていた。サロマトも一緒にやって来て僕の体の上へのっかり瞳をこちらに向ける。姉が「郁子ちゃんとはどうなの」と絡んできたから僕は熱が出たふりをして姉を遠ざけた。姉は窓をあけて夜風をひきいれて嫌味を言う。姉はつめたい手を僕の額にあてて「熱なんかないじゃん」と言った。その手の感触から僕はまた古村のことを思い出してしまった。姉は〇時には寝るようにと言い、自室に帰っていった。

風邪から回復して学校に復帰した日の午後、僕は一階の購買部で菓子パンを購入し教室に戻る渡り廊下で名前を呼ばれた。「塩田くん！」風に吸い込まれてしまいそうな声だった。右を向くと別棟の三階の渡り廊下に古村が立っていてこちらに向かって紙ひこうきを飛ばしてきた。紙ひこうきには手書きで

「こんどはわたしが見せたいものがある」

と書いてあり広げて見ると、ある駅名が紅い丸で囲まれた路線図だった。古村は微笑して廊下から校舎のなかに入っていく。校舎裏の焼却炉から煙が上がる。火葬場から上がる煙のようだった。

*

モノレールを〈町屋駅前〉で降りた。ダツフルコートを着た古村がケーキ屋のまえで待っていた。古村は何も言わずにさきを歩いていく。鎌倉中央公園の方角へ歩いている。横に並ぶと古村郁子は企むような顔をしていた。「塩田くんに魔法をかけてあげる」「魔法？」目の前に出されたのは「鍵」だった。「何これ？」「行けば分かるよ」

古村は鍵を空高く放りあげて手のひらでつかんだ。鍵がきっかけになったのか雪が一粒落ちてきているのが見えた。肌に触れると溶けて消えてしまいそうな雪だった。ふとまえを見ると西洋建築の立派な建物が建っている。木の樹が植えられたちいさな庭にブランコが設置されてある。「あれは教会よ」古村は言った。教会は解放されていてなかには大勢のひとがいた。施しを受けに来たのだろうか、つぶらな目をした犬も教会の周りをうろつい

ていた。礼拝に来たひとのなかにひどく太った丸眼鏡の中年男性がいて何かに焦っていた。ブランコで遊んでいた少女たちはその男性の方を見る。おおきな声をだして何かが到着することを恐れているようにも見えた。教会の柵のなかにいるひとたちが影絵のようにしか僕には見えなかった。遠くにあるものを眺めるような心地がした。その光景を背にして僕たちはさらに歩く。中央公園に向かう途中で葉牡丹が咲く花壇が見えてくる。花壇の向こうには天文台のような球形の輪郭の建物がある。葉牡丹のあざやかな色が道行くひとの目にとまり一瞬何かの公共施設かと見まがうけれど「FURUMURA」とローマ字が表札に刻み込まれていた。建物に近づくと、その幾何学的なデザインを活かすために外壁はきわめてシンプルで凹凸が殆どない。建物側面の窓はともにおおきく切り抜かれていて部屋のかなかにもしっかりと陽を通しそうだった。また建物上部の球形の壁には円状のちいさな天窗が見えて、いまにも天文学者の老人が顔を出しそうだ。

「(old gray house)」という建物で裁判官だった祖父のために建造されたの。一九八五年、当時は有名だった小牧信吾という建築家に依頼してね」

「小牧信吾、その名前聞いたことがある。確かこのまえ読んだ現代文の問題にポストモダン建築の旗手として紹介されていたな。あるときから急に建築を止めたんだよね」

「そう、芸術がばからしくなっちゃってしまい、いまは畑で野菜をつくって暮らしているそうよ。わたし幼いころ、小牧さんに会ったこともある」

「君はいま、ここに住んでいるの？」

古村は首を横にふる。ここは現在、古村のお兄さんが所有しているらしいが留学のために留守になっているそうだ。冬の陽が雲を通して、こぼれの上に落ちていく。僕は古村のお兄さんに会ったことがあるはずなのに顔を思い出すことができない。気が付くと僕を取り残すように古村は先を歩いていった。陽は傾いているのにその光はまだつよいままだった。真鍮の格子をひらく。葉牡丹にみちびかれて僕たちは玄関まで歩いていく。

「(old gray house)」の内観は均整のとれた灰色の氾濫だった。壁紙やカーテン、ソファやテーブルの灰色は明度の均衡をとることにとても気を配ったのだろう。灰色だけなのに実にさまざまな明るさの灰色が共存していた。家具の形状はふだん見慣れないものばかりで外国製らしい。モノクロの「線路」や「海岸」「空」などのちいさな風景の写真があちこちに架けられていた。一階は生活する空間となっており冷蔵庫やシャワールームなどが取り付けられている。薄らと廊下に埃がつもっていることから長期間、この建物は使われていないようだった。階段はなく梯子を登って中二階にあがると広い窓から光をとる明るい書斎になっていた。書斎にはおおきめの書き机が据えられてあり、万年筆やインク壺などが見えた。さらに梯子をのぼると球形にひろがった天井が現れた。周囲の壁は円状に本棚が設置されている。「ここはリビングで書庫なの」と古村が言う。部屋中央には石油ストーブが置かれていて古村がスイッチを入れると音をたてて年代物の機械がうごきだした。「臭くなったら換気扇回すから」古村は弁解するように言う。部屋があたたまるのには時間がかかったが部屋全体が熱を蓄えていくのが肌で分かる。四方を書物に囲まれた空間に僕は

言いしれぬ感慨を抱いた。部屋の端には寝袋とストーブがあった。古村のお兄さんは天体観測でもするように本を見上げながらここで寝ていたのだろう。僕はとても羨ましく思った。熟れた柿のような色の靴下を穿いた古村がこちらを見て言う。

「ここなら誰も来ないし、ゆっくり絵が描けると思うよ。わたし、ブランケットとってきて適当に勉強してるから好きに使っていいよ」

古村がブランケットと言ったときそれを毛布と翻訳するまでに時間がかかった。僕は小鹿のようにわなわなと足をふるわせて床にへたりこんでしまった。

「どうしたの」

「理想的な空間が広がっていて、自分のなかの何かが……それに適応できていない。簡単な言葉で言うとはびっくりしているんだと思う」

「わたしのかけた魔法がとけないうちに絵を描いてしまうことね」

古村は毛布を持ってきて自分の足の上にかけて。毛布と一緒にちいさな灰皿を持ってきて煙草を吸い始める。煙草吸うのか、僕は声には出さなかったが面喰った。

古村は折り畳み式のテーブルを持ってきて天井から吊りさげられた照明の下で参考書をひらき勉強をはじめた。僕は床に紙を置いて鉛筆で素描のつづきを描き始める。肉体はさきに描いてしまったから後は表情をつくっていく工程だ。彫りの浅い顔で表情をみつけるのが難しかった。古村の持つ淡い悲しさのような雰囲気絵に宿したかった。

ひとしきり絵を描いた後、僕は床によこたわった。古村は気にせず勉強をしている。円状に設置された棚の本は半数以上が洋書だったので僕には無縁のものでしかなかったが法学の書物のなかにほんの少しだけ文学作品もみつけられた。僕はスウィフトの『ガリバー旅行記』をひらき俯いてそれを読み始めるが古村のことが気になって全然文字を追うことができなかった。

辺りを見まわしているうちに僕はみつけないものを見てしまった。一葉の写真だ。その写真には紫陽花を背景にしておめかしをした少女が映っている。古村だろう。その隣に映っていたのは僕だった。二人は手をつないでいた。幼稚園ぐらいだろうか。瞬間、写真をとった場処を閃きのように思いだす。まだ市が家の近所に新しい小学校を開設するまえ、畑の沿道に紫陽花がずつとつづく路があった。幼稚園にはその路を通って通園していた。新しい小学校の開設と共にあの路は消えてしまったのだ。雨の匂いと紫陽花の匂いが蘇ってくる。連日曇り空がつづいていて気分が落ち込んでもあの路を通るとぱっと晴れやかな気持ちになったものだ。なつかしさに胸をうたれてしばらくその写真を見ていると僕と古村の傍にランドセルを背負ったもうひと組の男女がいた。男の子の方は眼鏡をかけてジャケットを着てとても賢そうに見えた。女の子の顔をじっと見た瞬間、戦慄が走った。そこに映っていたのは他でもない瑠璃だった。

天窗から夕陽がさして眠っている古村の顔にあたっている。薄暗い部屋でそこだけ光が落とされてまるで絵画のようだった。僕のいま描いている絵よりもずっと美しい。古村の顔をじっとみつめて巻貝のような耳に自分の耳をあててみる。何かを聞こうとしたのでは

なくて試してみたかった。あの映画のように自分も眠りのなかにひきずりこまれるのかを。接吻はできない。まだそんなことを寝ている隙にできるほどの関係ではない。こうして巻貝のなかにながれる古村の時間を自らの耳穴にながしこみたかった。同じ時間を生きる。そういうことが永遠にできれば素晴らしいだろうけれどいつか夜は確実にやって来る。

午後六時。なぜ明確な時間が分かったのかは謎だけど生きているうちにはそういう直感が何度かあたる時がある。長い髪が僕の顔にさらさらと落ちてきて目の前に顔があることに気が付いた。その唇でこう囁かれた。

「魔法には終わりがあるの」

　　瞼をひらいたとき、古村の姿が見えなかった。煙草の匂いも消えて教会から鐘が鈍く鳴っている。辺りには白い破片が散らばっていて花弁かと思まがったけれどさきほどまで描いた絵が破り捨てられていただけだった。紫陽花の花のなかで眠りたい、塩田禎夫は涙をぬぐった。

(了)